

コロナ禍におけるラオス農村部の暮らしとその変化

岩佐 光 広・荻野 なつれ

はじめに

本論は、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染が世界規模で拡大した2020年前半の時期の、ラオス人民民主共和国（以下ラオスと省略）の農村部の生活の様子について記述することを試みるものである。まず、本論の執筆に至るまでの経緯について簡単に述べておきたい。

筆者の1人である荻野なつれは、2019年8月から2020年4月上旬まで、ラオス中部に位置するヴィエンチャン県の農村部に滞在していた。官民協働海外留学支援制度「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム」の第10期多様性人材コースに採択され、現地での活動¹に取り組むためである。当初の計画では1年間の滞在を予定しており、2020年8月末に帰国する予定であった。だが、新型コロナウイルスをめぐる種々のリスクを勘案し、滞在をはじめて約半年が経過した2020年4月、在ラオス日本大使館が手配した臨時運航便にて帰国した。

現地での活動の予期せぬ中断と予定より5ヵ月も早い帰国は、荻野にとってショックを受ける出来事であったことは想像に難くなかった。彼女の言葉を借りれば、帰国後は、再度ラオスに行ける予定が立たないなかで、なにもやる気が起きずに過ごしていたそうである。そうした状況から脱するきっかけになればと思い、荻野が帰国してからしばらく経った頃、コロナ禍におけるラオスでの滞在経験をレポートとしてまとめてみてはどうかという提案をした。この提案に彼女も興味をもったようで、とりあえず書けることを書いてみようということになった。

それからしばらくして、荻野からA4で5ページほどのレポートが送られてきた²。そのレポートには、コロナ禍におけるラオスの人びとの生活が、彼女の視点と経験から記述されていた。内容が不明瞭だったり説明不足な箇所があったりはしたものの、その記述は、当時のラオスの人びとの日常生活がどのように変化していったのか、あるいは変化しなかったのか、といったことを垣間見ることができるものであり、新型コロナウイルスの感染拡大の影響下にあるフィールドについての個人的経験に根ざしたオート・エスノグラフィ [Ciribassi 2020] のように読むことができるものであった。

こうした記述は、「緊急対応的な記録（Rapid Response Collecting）」として貴重なものと感じら

©高知大学人文社会科学部 人文社会科学科 国際社会コース

¹ 具体的には、高知市立高知商業高等学校の生徒会を中心に行われているヴィエンチャン特別市とヴィエンチャン県でのラオス学校建設活動が25周年を迎える節目に、過去の活動写真と同じ人や場所を探して「今昔写真集」を作成する計画である。その写真集には村の人たちのライフヒストリーを載せることを前提としていたため、このレポートに描かれている同時期には村の成り立ちや村人の情報などについて調査を行っていた。

² このレポートは、トビタテ！留学JAPANの留学生OBOGが運営するホームページ「とまりぎ」上で、「コロナに立ち向かう留学生～世界各国のトビタテ生の記録～」(<https://tobitate-net.com/2020/08/18/post-10404/>)というタイトルで公開されている。

れた。緊急対応的な記録とは、特定の出来事に関連する事物、たとえば人びとの語り、チラシやポスターなどの一時的な印刷物、ウェブサイトのようなデジタルクリエイションなどを、その出来事が生じているその場その時に記録・収集していく手法である。主にパブリックヒストリーや博物館などの活動において用いられてきたが、新型コロナウイルスの感染がグローバルに拡大するなかで、世界各地のさまざまな組織がそれぞれの地域でコロナ禍における緊急対応的な記録に取り組んでいる [Kelly 2020]。

コロナ禍におけるラオスの人びとの暮らしの様子について書かれたものとしては、たとえばエリザベス・エリオット [Elliott 2020] や吉田香世子 [2020] によるエッセイがウェブ上で公開されているものの、全体としてみればその蓄積は限定的なものである。農村部における人びとの暮らしの様子について書かれたものについては、ほとんど発表されていない。こうした状況をふまえると、ラオス中部の農村部の人びとのコロナ禍における生活の様子を断片的ながらも記述している荻野のレポートは、コロナ禍のラオスに関する緊急対応的な記録の一つとして貴重なものであると感じられたのである。

しかしながら、先述したように、荻野のレポートにおける記述は、内容が不明瞭だったり説明が不足していたりする箇所が多々あり、そのままでは記録として不十分とも感じていた。また、ラオスでの滞在と活動について荻野と話をしていると、レポートには書かれていないが興味深いエピソードがたくさんあることもわかってきた。その後、レポートの内容についてやりとりを重ねていくなかで、共同でレポートの加筆修正の作業を進め、それを何らかの形で公開しようということになった³。

以上の経緯を経て本論は、緊急対応的な記録のひとつの試みとして、コロナ禍におけるラオス農村部の暮らしとその変化についてあらためて記述するものである。Iでは、背景的な情報として、新型コロナウイルスの感染が世界的に拡大し始めた2020年1月以降のラオスの動向を概説する。IIでは、もう一つの背景的な情報として、荻野が滞在していたヴィエンチャン県ポーンホーン郡にあるS村と、彼女のホームステイ先の概要について述べる。以上の背景的な情報を踏まえIIIでは、コロナの感染拡大が世界的にニュースになり始めた2020年1月から、荻野が帰国のために村を出た4月初頭までの約3ヶ月のあいだの、S村の人たちの生活とその変化について記述する。

I ラオスにおける COVID-19をめぐる概況——2020年1月以降の動向

まず、背景的な情報の1つとして、2020年1月から11月現在までの新型コロナウイルスをめぐるラオスの全体的な動向について概説しておこう⁴。

ラオスは、東南アジア諸国で唯一の内陸国であり、5つの国と国境を接している。国境を接する

³ 本稿の執筆の共同作業は、次のように進めていった。まず、荻野から送られてきたレポートをもとに、岩佐が内容の不足点や説明が不十分な箇所などをピックアップし、それらの点を中心にやり取りしながら、荻野と岩佐のあいだで情報の共有を行った。次に、荻野のレポートの内容と共有した情報をもとに岩佐が本論の構成を考え、全体の下書きを行った。そのうえで荻野が、記述の内容や表現を確認しながら適宜修正を加え、必要に応じて内容を補いながら、全体的に加筆修正をした。

⁴ 本章の内容は、在ラオス日本大使館の新型コロナウイルス関連情報 (https://www.la.emb-japan.go.jp/itprtop_ja/index.html)、ラオス新型コロナウイルス対策特別委員会 (<https://www.covid19.gov.la/index.php>)、およびWorld Health Organization LAOS (<https://www.who.int/laos>) の情報を主に参照している。煩雑さを避けるため、事実として公表されている内容については出典を省略し、それ以外の資料等を参照した箇所については適宜出典を表記することにする。

国の一つに中国があり、人の往来も多いラオスでは、新型コロナウイルスをめぐる動きは比較的早くから見る事ができた。

ラオス政府による新型コロナウイルスに対する対策が本格化したのは1月下旬からのことである。1月27日、ソムディ副首相を委員長とする新型コロナウイルス対策のための特別委員会が設置された。そこから、空港などの検疫の強化などのさまざまな感染拡大防止のための対策が実施されていった。

一般の人たちのあいだでも、1月半ば以降、新型コロナウイルスへの関心が高まっていた。SNSを中心に感染疑いの噂などの情報が盛んにやり取りされるようになり、人びとの生活の様子も少しずつ変化し始めていた。吉田香世子は、この時期の首都ヴィエンチャン特別市の変化を以下のように記述している。

1月半ば頃から新型ウイルスへの関心が高まり、人混みを避け、マスクを着用することが一般化していった。病院のみならず商業施設やオフィスビル、銀行等でも検温と手指消毒を実施し、小規模店でもロープを張ったり印をつけたりして、客と定員、客同士の間隔を確保する取り組みが広がった。外出・外食控えが進み、テイクアウトやデリバリーの利用が急増した。[吉田2020]

こうした新型コロナウイルスをめぐるラオスの状況が大きく動き出したのは、3月中旬からである。その発端となったのが、3月16日の朝にFacebook等のSNSで流れたニュースである。それは、ラオス国内の複数の県で新型コロナウイルスに感染した疑いのある者が79人確認されたというものであった。真偽が不確かであったにもかかわらず、このニュースはまたたく間に拡散された。近隣諸国で感染拡大が進むなかで「感染者ゼロ」の状態⁵にあったラオスの人びとのあいだに、新型コロナウイルスに対する不安感と危機感を生じさせた⁶。

その翌日の17日以降、今度はラオス政府から発表された全校一斉休校に関するニュースが人びとに衝撃を与えた。17日には保育園と幼稚園が休園、翌18日には小学校から大学までの全ての教育機関の休校が報じられたのである。また20日には、ラオス国営航空が3月22日から4月20日までの約1ヵ月、タイのバンコクとを繋ぐ航空便の運休を発表した。3月22日には物資の輸送を除いて、陸路でのタイとの往来も禁止するとの措置が発表された。ラオス国内の感染者はゼロのままであったが事態は少しずつ深刻化し、人びとの生活にも影響を与え始めた。

そして3月24日、ついにラオス国内で初となる新型コロナウイルスの感染者がヴィエンチャン特別市において確認された。ラオス保健省の発表によれば、感染が確認されたのは観光業に従事する30代の女性と20代の男性の2名である。いずれも検査の結果、陽性と診断され、市内の病院に隔離されて治療されることになった。そしてその翌日には、彼らの足取りが公開され、濃厚接触の可能性がある人には健康状態を自己観察するようにとの呼び掛けがあった。

その後も1日1～3人の新規感染者の確認情報が続くなかで、3月29日、新型コロナウイルスの

⁵ 3月末までラオス国内での感染症例がゼロとされていたことをめぐっては、さまざまな指摘がなされていたが、吉田 [2020] は「感染隠しというよりは検査体制が不十分で疑い症例を把握できていないというのが大方の見方」であると指摘している。

⁶ 荻野によると、このラオスでの感染疑惑者のニュースが広まってから、隣国のタイやベトナムにいる親戚や知り合いからマスクや手指消毒用のアルコール消毒液を仕入れ、それをFacebook上で販売を始めたラオス人が現れたという。

感染防止対策を強化する首相令が発令された。そこには、4月1日から19日までの外出禁止令と休業命令が含まれることが公式に伝えられた。国内での感染拡大がそれほど深刻とは言えない状況において、ラオス政府がかなり厳しい対策をとった背景には、ラオスを含む上座仏教圏の地域的な事情が影響していると考えられる。ラオスを含む上座仏教圏では、仏暦での新年を4月中旬に迎える。2020年のラオス新年（ピーマイ・ラーオ）は4月13日から16日だった。例年、人の移動が増し、親戚や友人が集まったの飲食の機会も一気に増えるこの時期は、感染が爆発的に拡大してしまうリスクが極めて高かった。19日までの外出禁止令などの措置は、ラオス新年のそうしたリスクへの対策を講じたものだった。

4月中旬以降、しばらくのあいだ新規感染者ゼロが続き、5月に入るとさまざまな規制が段階的に解除されていった。たとえば、4月以降は全便運休していたラオス航空の国内線の運行が再開された。また、3月中旬から休校が続いていた学校への登校も部分的に可能となり、6月2日には全学年の登校が可能となった。3月末から5月上旬にかけてのラオス政府による強行ともいえる新型コロナウイルス対策は、予防し感染拡大を防ぐという点においては成功を取めたといえよう〔吉田2020〕。

こうした状況をふまえ、6月10日、ラオス政府はヴィエンチャン特別市において式典を開催し、新型コロナウイルスに対して「勝利した」ことを宣言した。その要因として、新型コロナウイルスのリスクを早い段階で察知し対策を講じたこと、政府を中心に関連機関や民間組織、一般の人びとが一丸となって対策に取り組んだこと、近隣諸国や国際機関からの迅速な支援があったことなどが挙げられた〔Vientiane Times 2020〕。

7月以降、毎月1人程度の新規の感染者が発生しており、11月23日には計14名（ラオス国籍1名、外国籍13名）の新規感染者が確認された。同月26日には、市中感染のある国からの渡航者に対するビザの発給停止などを含む新たな感染防止対策についての通知が出された。こういった動きは見られるものの、11月末までの感染者数は40人弱、死亡者はゼロという状況にあり、全体としてみれば小康を保っているといえよう。こうしたなかでラオス政府は、感染拡大を防止する種々の対策を講じつつ、出入国の規制などの緩和を段階的に進めている。

II S村の概要

もう一つの背景的な情報として、荻野が滞在していたヴィエンチャン県ボンホン郡にあるS村の概要⁷と、そこでホームステイをさせてもらっていたLさん一家について述べる。

S村は、ラオス中部のヴィエンチャン県ボンホン郡に位置する低地の農村である。首都ヴィエンチャン特別市からラオスを南北につなぐ幹線である国道13号線を60キロメートルほど北上し、そこから東に折れて国道10号線をしばらく進み、さらに国道から赤土の一本道に入って300メートルほど行くとS村の入口に至る。この一本道がS村の中央線となっており、その左右に家屋や雑貨を取り扱う商店などが2キロメートルほど並んでいる。家屋などの裏手には、田んぼや畑が広がっている。

S村は低地民（ラオルム）の村で、人口は710人、世帯数（家屋数）は143世帯である。S村が開村したのは120～130年ほど前のことで、2006年に近隣にあった2つの村と合併して現在の形になっ

⁷ S村の概要については、2016年8月に岩佐がS村で実施した予備調査のデータも使用している。

た。住民の主な生業は、水田での稲作や葉野菜を中心とした農作物の栽培などの農業や、腰かけイスやテーブルなどの竹製品の製作・売買である。くわえて、郡の中心部へのアクセスが比較的良い立地であるため、村外の勤め先で働いている人も少なくない。勤め先としては、県や郡の役所で働く公務員、警察官、縫製工場、携帯会社などがある。

村内にある教育機関は小学校のみである。開校したのは1975年頃のことである。2019年時点で教員は、隣村から通う校長先生1人とS村に暮らす女性教員の2名である。全校生徒は45人で、1～3年生の3学年、4～5年の2学年がそれぞれ同じ教室で学んでいる。ただ近年は、朝夕の送迎の関係から両親の職場に近い村外の小学校に通う子どもや、教育環境を考慮して村外の（そして稀ではあるがヴィエンチャン特別市内の）私立小学校に通っている子どもも少なくない。小学校を卒業後は、隣村にある中学校や、隣郡にある高校へと進学することになる。

上述のようにS村から300メートルほどで国道に出ることができるため、S村の周辺部も村人たちの生活圏に含まれている。国道10号線の道の両側には、食堂や若者向けのカフェ、食料から日用品などを取り揃えた商店、ゲストハウスなどが点々と並んでおり、食堂や商店などはS村の人たちも日常的に利用している。また、国道10号線を車で20分ほど進むとヴィエンチャン県の中心部であるヴィエンカム郡に行くことができ、その途中にあるヴィエンカム郡の大きな市場もよく利用される。以下、これらの国道沿いや近隣の市場などを総称して「S村周辺」と呼ぶことにする。

荻野がS村に滞在していた際にホームステイしていたのは、S村の副村長であるLさんの家である。ヴィエンチャン県での滞在を開始した2019年9月後半からしばらくはヴィエンカム郡でホームステイをしていた。その後、11月頃からS村を中心に活動をするようになり、ヴィエンカム郡の家から通っていたが、その移動に少し時間がかかることを気にかけてくれていたLさんが申し出てくれて、週の半分はLさん宅にホームステイさせてもらうことになった。12月頃からLさん宅での滞在を開始し、新型コロナウイルスの感染拡大が世界的に進んでいった1月末頃から帰国するまでもLさん宅に滞在していた。

Lさんは、デニムやスポーティーなスニーカーを履くことを好む30代後半の女性である。出身はラオス南部のサラワン県である。2000年にヴィエンチャン県に移り住んだ。その当初は、現在のLさんの家から車で15分ほどの距離にある母方親族の家に住んでおり、その軒先で小さな飲食店を営んでいたそうである。その後、2008年頃に結婚し、夫の出生地であるS村に越して来た。2012年には一男を授かった。現在は、1階建てのコンクリート壁の家屋に、夫と息子との3人で暮らしている。

Lさんの主な生業はアヒルの卵の販売である。住んでいる家屋の裏手を100mほど進むと約2000羽のアヒルを育てている敷地が広がる。ここで毎朝、夫とともに6時過ぎまでには卵を集め、アヒルに餌をあげる。その後、集めた卵をきれいに拭き、1段30個入りのパレットにサイズごとに分けて入れていく。村外の私立小学校に通う息子を送ったあとに、卵の配達を行う。午前中はボンホン郡の市場で店を構える女性宅や、卵の販売を行う隣村のコーヒーショップ、さらにヴィエンカム郡の市場などに卵を卸す。卵を卸す先は他にも複数あり、その日によって卸す相手は異なるのだが、平均1日3ヵ所ほどを車で40～50分ほどかけて回る。30個入りのパレット一段の卵を30,000キープ⁸で販売し、1日で20～30段ほどを卸している。

2017年頃から務める副村長としての仕事も多忙である。村長とこまめに連絡をとりながら、新た

⁸ 当時のレートで、10,000キープが約110円であった。

に入ってきた住民の世帯情報の整理や、村内で執り行われる儀礼や各種のイベントの準備など、幅広い業務をこなしている。他村で行われる会議に出席することもしばしばあり、多いときは週に2～3度、いつもははかないシン（ラオス風の巻きスカート）を着用して近隣の村で行われる会議に出かける。

副村長の仕事が特でない日のLさんは、午前中は庭や台所の掃き掃除や洗濯などの家事をする。家事をする以外は、家の中や庭に吊るされたハンモックなどでSNSをチェックしたりしながらのんびりと過ごしている。毎日夕方17時頃には車で10分ほどかけて息子を迎えに行く。

夫のXさんは、Lさんより4歳年上の40代前半である。S村の出身で、現在はヴィエンチャン県庁に勤める公務員である。毎朝、Lさんとともにアヒルの卵集めをした後、平日の朝はワイシャツにスラックスをはいて9時前には車で出勤し、夕方の16時半ころには家に帰ってくる。S村出身のXさんは、同村にある田んぼや両親から受け継いだ17頭の牛などを有している。しかしその管理は、自分ですることはなく、近くに住む妹夫婦に任せている。

Lさん夫婦の一人息子であるYは、小学3年生である。S村から車で10分ほどの距離にある私立小学校に通っている。同小学校には幼稚園も併設されており、Yは幼稚園からそこに通学している。夫のXさんによると、本当はヴィエンチャン特別市にある学校に通わせたいのだが、試しに特別市に住む親戚宅にYを一日預けてみると、両親が恋しくなって泣いてしまったため、特別市の学校に通わせることは断念し、現在の小学校に通わせているという。

Ⅲ コロナ禍のS村の暮らしとその変化

以上の2つの背景的な情報をふまえ、ここからは、荻野の経験をもとに、コロナ禍での農村部の生活の様子について記述していく。フィールドとなるのは、上述したS村である。対象となる期間は、コロナの感染拡大がニュースになり始めた2020年1月から、荻野が帰国のために村を出た4月初頭までの約3ヶ月である。2020年1月から3月上旬まで、3月中旬、3月下旬と3つの時期に分け、ホームステイしていたLさん一家の様子を中心にS村の暮らしの変化を記述していく。なお、本章の記述は荻野の視点から村の様子を描いたものであるため、以下の記述における「私」とは荻野を指している。

1. 2020年1月から3月上旬

ラオスでもすぐに新型コロナ感染者が出るかもしれない。私がそんなことを考えるようになったのは、隣国の中国で新型コロナウイルス感染症の発症例が発表されてからしばらく経った2020年に入ってからのことだった。

現在ラオスでは、新型コロナウイルスは、英語のCOVID-19をラオス語読みにした「コーヴィット・シップガオ」という呼称が一般的である。しかし、2020年1月頃は、主にSNSを通じて世界的に新型コロナウイルス感染症の感染が拡大していることはラオスでもニュースになっていたが、S村の人たちのあいだでこの呼称は定着していなかった。S村の人たちは、新型コロナウイルスのことを「パニャート・ゼーン(ພະຍາດຈີນ)」と呼んでいた。ラオス語でパニャートは「病氣」を、ゼーンは「中国」をそれぞれ意味し、パニャート・ゼーンで「中国の病氣」という意味になる。

この呼び名からも垣間見られるように、この時期はまだ、村の人たちはどこか新型コロナウイルス感染症を「他国の問題」のように感じていたように思う。この頃、村の人たちのあいだでは、新

型コロナウイルス感染症が流行っているのは中国やヨーロッパなどの寒いところであり、気温の高い地域では感染症は流行しない、だから「暑い気候のラオスではパニャート・ゼーンにかかることはない」ということを言っていた人もいた。また、「ラオス人はビールを多く飲むからパニャート・ゼーンにはならない」といった冗談もよく聞かれた。

そうした状況は、2月に入っても大きくは変わらなかった。2月上旬、S村のある男の子が犬に噛まれ、ヴィエンカム郡にある病院に治療に行くことになり、私も同行することになった。ラオスでの新型コロナの感染拡大を気にし始めていた私は、同行した病院の売店で10枚入りのマスクを8,000キープで購入した。この時期、村の中でも外でもマスクをしている人はいなかったが、私は病院でマスクをつけ、村に戻った後も、この日は1日マスクを着用していた。そんな私の様子を見た村の人たちは、「ナツレはパニャート・ゼーンが怖いのか？」とたずねてきたり、「ナツレはパニャートを怖がっている」などと言って私のことを笑ったりしていた。結局、この時期に私がマスクをつけたのは、この一日だけになった。

2. 2020年3月中旬ころ

新型コロナウイルスの感染拡大が「遠く離れた場所の出来事ではない」とラオスの人びとが感じはじめたのは、3月中旬のことだった。3月16日の朝、ラオスの人たちのあいだに「ラオス国内で79人の“感染疑惑者”が出た」というニュースが一気に広まったのだ。ラオスでは、テレビや新聞といったマスメディアよりも、Facebookを中心としたSNSが主な情報源となっている。S村の人たちも例外ではない。ラオス国内での新型コロナウイルスの感染疑惑者が出たというニュースは、村内であつという間にシェアされた。その日は、ラオスでも感染の可能性があるかもしれないという話題で持ち切りとなった。

普段からよくSNSをチェックしているLさんは、3月上旬から他国での新型コロナウイルスの感染拡大の様子を気にかけており、その情報を食事時の会話の話題にもよくあげていた。新型コロナウイルスの感染疑惑者が出たというニュースが流れとき、Lさんと私は卵の出荷準備をしていたが、ニュースを知るや否やLさんは「今日から息子を学校に行かせず、休ませる」と私に告げた。

息子のYは、突然学校を休まされたことに不満をもったようで、少々駄々をこねており、私はお菓子をあげたりしてYをあやしていた。落ち着いてきたYは、しばらくすると家の敷地内で1人遊びを始めた。学校を休ませた日、Lさんは息子に感染のリスクがあるゆえに「家（の敷地）から出ないように、友人らとも遊ばないように」と告げていた。しかし、遊びたい盛りの男児が約束を守れるはずもなく、すきを見つけては近所に暮らす友人宅に出掛けて行き、そのたびにLさんに叱られていた。

感染疑惑者のニュースが流れた翌日の3月17日、ラオス政府により全ての保育園・幼稚園が休園されることになり、その翌日の18日には小学校、中学校、高等学校、大学等の学校のすべての休校が決定されたのは上述の通りである。そのためS村でも、普段は村内外の学校に通っている子どもたちが家にいることになった。その日は、子どもたちが不在で静かな普段の平日とは異なり、友人らの家を互いに行き来している子どもたちの姿を朝から見る事ができた。一方、大人たちについては、教育機関に勤める者以外は休みになったわけではなく、普段の通り農作業に出たり仕事に行ったりしていた。学校が休みで家にいる子どもたちの世話は、主に家にいる祖父母などの親族らがしていた。村の中で主に活動していた私もまた、「なにか作って」と頼んでくるYや近所の子どものためにチャーハンや卵焼きなどを作ってあげることもあった。

この時期は、学校の全校休校などS村の人たちの日常生活にも変化が現れはじめ、人びとのあいだにも新型コロナウイルスという存在が意識されるようになってきていた。しかしながら、この時期でも人びとの危機感や緊張感は薄かったように思う。実際、村の中でも、人通りの多い村の周辺部でも、マスクをつけている人はほとんどいなかった。また、他所に遊びに行ってしまうYを叱っていたLさんも、翌日にはYがどこかに遊びにいても特に何も言わなくなっていた。

こうした状況に変化が生じたのが、3月20日頃からである。その日の前後、あるローカルな噂が口コミで広まった。その噂とは、S村から車で40分ほどの少し離れた場所にある他郡の市場でのことである。先に述べた感染疑惑者と接触があった可能性のある人が、その市場に出入りしていたらしく、20日からしばらくその市場は閉じていたらしい、ということであった。私が帰国するまでにこの噂の真偽を確かめることはできなかった。だが、村の人にとっても新型コロナウイルスの感染を身近に感じさせる噂だったようである。それ以降、村の中ではマスクはしないものの、村の外に行くときにマスクを持っていく村人を見かけるようになった。

3. 2020年3月下旬以降

ヴィエンチャン特別市でラオス国内では初となる新型コロナウイルス感染症の感染者が2人確認された3月下旬になると、S村周辺の様子は随分と変わっていた。

S村の近くを走る国道10号線沿いにある人通りの多い商店や飲食店などでは、新型コロナウイルス感染予防に対する動きが見られた。たとえば、ある商店では、店の前にロープが張られ、「お互いの安全（感染予防）のために1メートル離れて」との注意書きが記された看板が掲げられていた。その店では、ロープの外側から購入したい商品を伝え、店番の人が虫取り網に商品を入れて渡してくれるようになった。また、若者向けのカフェでは、テイクアウトを推奨する掲示が出され、店の前には手指消毒用のアルコール消毒液が置かれるようになった。ラオス保健省とUNICEFが作成した新型コロナウイルスの感染予防を呼びかけるポスターがカフェやレストラン、自動車修理工場など人通りのある場所に掲示されるようになったのもこの頃からであった。

またS村周辺では、それまではあまり見かけなかったマスクを目にすることが増えた。多くの人が集まる市場に行く人のほとんどがマスクをするようになっていたし、人通りの多い国道10号沿いの商店やカフェの店員や客もマスクを着用するようになっていた。ヴィエンカム郡やボーンホン郡の市場ではマスクの販売が目立つようになった。2月上旬では10枚セットが8,000キープで売られていたマスクも、この時期になると1枚5,000キープになり、ピンチハンガーに1枚ずつマスクをぶら下げてバラ売りするようになっていた。

こうしたなかでのS村の人びとの様子を見てみると、村外に行く場合でも、どこに行くかで感染予防に対する差がみられた。上述のように人が集まる大きな市場に行くときは、マスクを持って出かける人が増えていたが、国道10号線沿いの商店など、比較的人の出入りの少ない小さな店に行くときなどは、マスクをすることは少なかった。この時期に私がLさんと国道沿いにある自動車修理工場に行ったときも、S村の友人とカフェに行ったときも、私たちはマスクを持っていなかった。村の中では、この時期になってもマスクをつけている人はいなかった。

食料調達に関しては、他国で起こっていたような飲食品などの買い占めは、調査地では見受けられなかった。ただ、村内で商店を営んでいる人らは、村外の市場が閉まって仕入れができなくなることには備えていた。普段は、1週間に1度程度の頻度で、バイク1台で持ち運びできる程度の量の商品の仕入れを行っていた。だが、上述した他郡の市場が閉まったという噂もあってか、いつも

より多くの商品を買いだめし、バイクで2～3往復して運んでいた。商品の中身も、インスタントラーメンや子ども向けのスナック菓子など保存の効く食品が多かったように見えた。

3月29日、4月1日からラオス新年を含む4月19日まで「ラオス全土の外出禁止・休業命令」が発令されて以降、観光等を目的とした村や郡、県をまたぐ移動が制限され、郡境や県境には警察や軍の関係者が立つようになった。このようにラオスの都市部やS村周辺の人通りの多いところなどでは、新型コロナウイルス感染症の感染予防のための対策などによって非日常的な状況にあることが感じられるようになっていた。

S村内の日常生活においても、新型コロナウイルス感染症をめぐるやり取りが見られるようになった。たとえば、食事の前に「手洗っておいで、コーヴィットになりたいのか?」と親が子どもらに感染予防のための手洗いを促すことをよく見かけるようになった。そうしたなかで、子どもたち自身も「手を洗わないとコーヴィットになるよ」と言うようになっていた。

しかし、こうした変化が見られるものの、S村の人びとのあいだには新型コロナウイルスに対する危機感や緊張感のようなものは、この時期になってもそれほど感じられなかった。村の中心の一本道を歩いていると、「いつもより住民が多い感じ」がなんとなく嬉しく楽しくもあった。それはヴィエンチャン特別市にある学校に通っている筆者と年齢の近い若者たちが村に戻って来ていたことや、普段学校に通っている彼らが日中に会うことのない私に対して積極的に話しかけてくれることがそう感じさせたのかもしれない。

小・中学生の子どもたちは朝からサッカーをして走り回り、日中には「家に入って！（太陽に当たりすぎると）熱がでるよ！」と炎天下に居過ぎることを大人たちに叱られ、時々親のスマートフォンで携帯ゲームをして過ごし、夕方からはまたバレーボールをしたり、近所に暮らす青年の家で闘鶏の様子を少し離れて見ていたりしていた。

仕事が休みになった大人や学校が休みになった青年らは、家族から頼まれて家屋や敷地を囲む塀の修理などをしたりしていた。Lさんの家にも、Xさんによって新しい駐車場が作られた。Xさんの職場は、3月25日前後ごろから、日替わりでの出勤になっており、仕事に出掛けるのは週1～2日ほどになっていた。家にいる時間が増え、また近所の青年たちや職場の同僚・後輩たちの人材確保ができたこともあり、一気に作られた。その後は、当然のようにビールともち米、焼き魚やアヒル料理などが用意され、一緒に仕事をした人たちでの共食が行われていた。政府の自粛要請では伝統行事や冠婚葬祭、会議を含む10人以上の集会は禁止されていたものの、彼らは「(村は)土地がひらけているから大丈夫だよ」と笑いながら、10人ぎりぎりのところでビールを飲んでいて、警戒しながらも、どこか楽観的に捉えている彼らが印象的であった。

政府が国内での新型コロナウイルスの感染を発表し、自粛ムードに入った3月25日前後の頃こそ、村の人々はこれまでの日常とは異なる日常を「楽しんで」いたように思う。しかし、それから約1週間が過ぎ、私が日本に帰国する直前の3月末から4月初頭の頃には、村外の市場などに行くことがためらわれ、村内の限られた範囲内での移動しかできず、思ったように働くこともできなければ、学校にも行くことができない、そんなさまざまな制約が課せられる日々に、「ブア・コーヴィット・レーオ（もうコロナには飽きたよ）」という声を、子どもから大人まで幅広い年代で聞くようになっていた。

おわりに

以上、緊急対応的な記録のひとつの試みとして、コロナ禍におけるラオス中部の農村であるS村の暮らしとその変化について記述した。最後に、本論を執筆することで気づいた点について簡単に述べておきたい。

新型コロナウイルスをめぐる人びとの対応については、「ラオスでは」「日本では」「アメリカ合衆国では」といったように、国家を単位として語られることが多いように思う。しかし、たとえば吉田香世子 [2020] が記述した都市部のヴィエンチャン特別市では1月半ば頃から日常的にマスクをつける人が現れていたのに対し、荻野が滞在していたS村の人びとのあいだでは3月末でも日常的なマスクの着用は限定的であったように、ラオスという国全体で同じように事態が進行していたわけではない。当然といえば当然のことなのだが、国家単位で語ることが先行しがちな現状においては、この点を改めて認識しておく必要があるだろう。ラオスの国家としての動向を踏まえつつも、ヴィエンチャン特別市にとどまらず、他の都市、他の農山村における動向を記述・記録を蓄積しておくことが求められよう。

そうした記述・記録を試みる際、対象とする地域の地理的な条件も合わせて記述しておく必要がある。たとえば、農村部と一言でいっても、都市部へのアクセスはしやすい立地なのか、他村との距離はどの程度なのか、幹線道路沿いなのか、大きな市場が近くにあるのか、といった地理的な条件は異なるし、その条件次第で新型コロナウイルスに対する人びとの危機感や緊張感には違いがあることが予想できる。

地理的な条件にくわえて、対象とする地域に住んでいる人たちの「生活圏」を意識して記述していくことも大事だろう。同じ地域や村に住んでいても、年齢や性別、仕事などによって、日常生活における行動の範囲は異なる。本論では十分に記述できなかったが、同じ地域内での生活圏の違いによる、新型コロナウイルスに対する人びとの認識や対応のズレなどが描けたとしたら、より動態的な様相を記述することができるだろう。

参考文献

- Ciribassi, Rebekah. 2020. COVID-19: Views from the Field. <http://blog.castac.org/2020/04/covid-19-views-from-the-field/>. 2020/11/30.
- Elliott, Elizabeth. 2020. Protecting the Boundaries, Keeping a Strong Heart in Laos. <https://medanthucl.com/2020/04/14/protecting-the-boundaries-keeping-a-strong-heart-in-laos/>. 2020/11/30.
- Kelly, Jason M. 2020. "The COVID-19 Oral History Project: Some Preliminary Notes from the Field." *The Oral History Review* 47(2): 240-252.
- Vientiane Times. "Lao Government Announces Victory over Covid019." https://www.vientianetimes.org/la/freeContent/FreeContenten_Lao111.php. 2020/11/30.
- 吉田香世子 (2020) 「ラオスにおける新型コロナウイルス対策——「成功」の背景と今後の展望」CSEAS NEWSLETTER 4: TBC. <https://covid-19chronicles.cseas.kyoto-u.ac.jp/post-030-jp-html/>.